

平成16年度
全国山岳遭難対策協議会

報告書

開催県 高知県

期 日 平成16年7月8日(木)～9日(日)

会 場 県民文化ホール (グリーンホール)

【全体会・第1分科会】

高知会館 (白鳳の間) 【第2分科会】

高知会館 (飛鳥の間) 【第3分科会】

講演要旨

テーマ

「山岳救助隊の現場から」

警視庁青梅警察署山岳救助隊副隊長

金 邦 夫

「講演講師のプロフィール」



紹介

氏名 こん くに お
金 邦 夫

生年月日

昭和22年 5月16日 出身地：山形県小国町

略 歴

昭和41年 警視庁入庁
昭和46年 警視庁機動救助隊（レスキュー）隊員となる
昭和52年 第七機動隊レンジャー分隊長となる
平成 2年 警視庁青梅警察署山岳救助隊員
平成 6年 警視庁青梅警察署山岳救助隊副隊長

主な山歴

高校時代から登山を始め、東北の山々を登る。
昭和45年 警視庁山岳会クライム・ド・モンテローザを創設
昭和52年 アメリカ ヨセミテにおける山岳救助研修に参加
冬季に一ノ倉沢、幽ノ沢、鹿島槍北壁、赤石沢奥壁等を登る。
ヨーロッパ三大北壁、グランドジョラス（昭和57年）、アイガー、
マッターホルン（平成3年）等に挑戦する。

現 在

警視庁山岳会クライム・ド・モンテローザ会長
警視庁山岳救助技能指導官

そ の 他

年間約30～40回山岳救助出動
平成14年 山岳救助活動の記録と奥多摩の魅力を綴った「奥多摩登山考」
を出版

私は、警視庁青梅警察署で山岳救助隊をやっています。奥多摩山域で今やっているのですが、奥多摩は田舎です。文部科学省から講演を依頼された時に、ちょっとこんな田舎の救助隊じゃなくて、もっと都会の長野県、富山県あたりの救助隊に依頼した方がいい、私は出来ませんと言ったんです。長野県、富山県、あの辺の山は、山においては都会です。銀座もあります。表銀座、裏銀座。長野県、富山県は遭難が非常に多いのです。しかし、今、各県でも、低山、中級山岳、その辺での遭難が非常に多くなってきています。そういうことから、奥多摩の田舎の救助隊にやってもらおうじゃないかと決まったような感じで、私もうまく話せるかどうか分らないのですが、一応お受けしたということです。

その低山、中級山岳と言いますか、奥多摩では、最高峰が雲取山で、深田さんの1000名山にも入っている山でもあり、それが2017メートルです。これが最高峰で、あとはもう全部1000メートル級の山です。

そこで、去年の統計を見ると、東京の山で60件の遭難があり、8名死亡、そういう記録が出ているのです。東京の山で8名死亡というのは、ちょっとこれはおかしいです。特異な遭難でないと新聞等には載りませんから、まさか奥多摩の山で8人が死んでいるとは誰も思っていないと思います。それを話すと「えっ」とみんな驚きます。しかも、中高年の人が多くなってきましたので、土日祝日になると、奥多摩の青梅線はいつも満杯で、中高年ばかりがやってきます。それで、救助要請っていうのも頻繁に入るわけです。時にはダブルで、時にはトリプルで入ることもあります。そのように、頻繁に奥多摩の山でも遭難が起こっているということなのです。

雲取山を頂点とする1000メートル級の山が連なっているわけですが、奥多摩の山は、どれも日帰りできる山です。縦走するのであれば、一泊、二泊、その程度必要なコースもありますが、ほとんどが日帰りできる山行、そういうことでせいぜい6、7時間あれば登って帰ってこられるという気安さ、そして都心から約2時間で登山口へ着く、そういうアクセスの良さということもあって、中高年に非常に人気がある山です。それで、奥多摩は観光地です。日原鍾乳洞とか、小河内ダムができ、その人工湖である奥多摩湖、そういう風光明媚な場所ですから、観光地として観光客も大勢集まってきます。その延長として、山に登るんです。観光の延長で奥多摩の山に登る。そういう方がたくさん遭難事故を起こしているわけです。たいした事故はないのですが、年間8名死亡するというのは、やはりたいした事故です。

そこで、われわれの山岳救助の組織、体制は、警察と消防に山岳救助隊があります。警察は、青梅警察署と隣の五日市警察署、両方とも18名くらいの体制でやっています。これは18名と言っても、ほとんどが駐在所員です。たとえば、奥多摩町では10カ所の駐在所があります。それと近くの御岳、沢井、2つの駐在所を含めて12名が駐在所員です。みんな訓練を受けて、山岳救助隊として活動しているわけです。消防も奥多摩消防署、青梅消防署、あと秋川、向こうの方の消防にも救助隊がありますから、それで間に合っているというか、東京には遭難対策協議会がないんです。だから、公務員だけで間に合うとい

うことなのでしょう。

実際、負傷者の救助要請、もしくは転落死亡とかの救助要請が頻繁にあるわけですが、警察と消防の救助隊で大体片付けています。ただ、行方不明者、これも非常に多いわけです。あの辺は、低山特有の林業が盛んで、森林の山ですから、そういう仕事道とかいう道が多くて、よく迷って入って行って滑落、転落という事故が多いのです。行方不明者になると、原則では消防は出ません。消防は、ケガをして救助を求めてくる、そういう場合には出るわけですが、行方不明になると警察が主体となってやるわけです。せいぜい長くて1週間くらいです。各隊員がみんな駐在所員ということですから、他の仕事がいっぱいあるわけです。防犯、交通、そういう仕事がたくさんあり、それに専従してやっていくというわけにはいきません。

そこで、警視庁の機動隊に、30名くらいの山岳レンジャーを作って、搜索の場合はその人たちも出動して、搜索にあたるのです。それと警備2課というところに警備犬がいます。浮遊臭気で遭難者、人間を探すという犬が何頭かいて、担当者がいますが、そういう警備犬を投入することもあります。また、警視庁航空隊も手伝ってもらい、今どこの都道府県においても、ヘリが主役になりつつあります。しかし、奥多摩は、そういう林業の山、森林の山ということで、谷が深く、尾根が急峻なんです。そういうことで、ヘリを使うにはなかなか難しい場所がたくさんあります。ですから、アルプスのように飛んで行って吊り上げて帰るといって、単純にそういうふうにもいかないのです。人力で行う方が、ヘリを使うより回数は多いのです。

奥多摩における山岳救助は、とにかく山を知ることと、体力があること、これが必要条件です。これはどこの都道府県でもそうでしょうが、山を知ることが一番です。うちの隊員が、みんな駐在所員ということで、その土地に勤務し、長い人は30年とか20年同じ場所で勤務しています。ですから山をよく知っています。今どんどん若い人も入ってきています。30年も勤務すれば、当然年齢も高い人が多いということですから、救助隊も高齢化しています。しかし、若い人も、山の好きな人も入ってきているので、何とか、消防と警察でやっているという現状です。

それと今俄然、中高年になってから山を始めるという人が非常に多くなっています。しかし、これも1980年代からもう逆転現象で、若い人がいなくなって中高年が多くなったという感じです。今から30年～40年前は、山へ行けばみんな若者ばかりでした。中高年は少なかったものでした。しかし、ここに来て、若い人は本当に少なくなりました。中高年になり健康に気をつけるようになって、アウトドア志向で急に始めたものですから、勉強もしていない。昔から続けている人はいいのですが、中高年になって急に始める場合は、奥多摩あたりの山から始めようかということで、奥多摩の山をどんどん登ってくるのです。中高年になってから始めても、もちろん若いときから初めても、皆上昇志向で、奥多摩に登ったら次は丹沢行って、丹沢に登ったら次は八ヶ岳に行って、そして谷川に行って、北アルプスに行くと、60歳から始めてもどんどん上昇志向なのです。いつまでも

奥多摩の山ばかり登っているわけにもいかないと、その上昇志向はいいことなのですが、ただ年齢を重ねると、今度は体力が下降線をたどるのです。気力は上昇、体力は下降線、このギャップが非常に遭難に結びつきやすいということではないでしょうか。ですから、最近始めた人っていうのは、非常に体力不足ということもあります。

この前、NHKのクローズアップ現代でやっていましたが、持久力はある程度大丈夫ですが、ただ、バランス感覚が中高年になると非常に落ちるとのことです。体力不足、それから山を知らないということ。知識不足、山に対する知識が非常に不足しているのです。それに、何かアクシデントがある。雨が降った、ケガをしたなどアクシデントがあってもそれに対応できない、経験不足です。それからまるっきり自分の登る山も名前も知らない、そういう他人依存、ほんとに初歩的なことをやらないで遭難するという中高年が非常に多いということ。ですから、奥多摩なんかの低山で8人も死んでいるのです。これは何とかしなければならぬ。私もいろいろ危ないっていうようなことを「山と溪谷」だとか「岳人」なんかを一生懸命あおって書いてもらっているのですが、読んで欲しい人はそれを読まない。そういう未組織の中高年もたくさん登っているわけですから、これは私もどうやったら少なくなるか、非常に苦慮しているところです。

そういう中高年の方は、プライドがないのです。われわれが今から30年、40年若い時には、山はスポーツなんかではないという変なプライドを持って登っていたのです。山は哲学だとか、「より困難、より高さを求めて」とかなんとか言って、非常に粹がって登っていたような気がします。ですからプライドっていうのは持っていたように思うのです。

高水三山なんていう低い山があり、そこでご婦人が転んで足を折ったか捻挫したということで救助要請が入り、4人ほどで行ったんです。「もう少し何とか歩けませんか」、「山屋としてのプライドがあるでしょう」というと、「私プライドなんかありません」こうです。それも「何キロあるのですか？」って言ったら「65キロです」。私59キロですよ。これどうしようかと思ったのです。この程度だったら背負って運ぼうということで、背負って運んだら、やっぱりプライドがないですから、背中でよくしゃべるのです。「私は北アルプスに夏行った」とか、それはいいですが、少し黙っていてくれと言いたいのですが、「そうか、そうか」と言って聞き、「こんなに汗をかいて」と、「あんたが乗っかっているからだろう」と言いたかったんです。でも、黙々と下ろしました。下までしゃべりっぱなしです。ですから、足をケガしないで、口でもケガしたら、少しは静かになるだろうなんて思ったりもしたのですが、やはりそういうことも言えません。そういうプライドがないのです。

また、30人のパーティーで、御岳山から下りてくる道幅の広い鳩ノ巣に下りる道路があり、あと30分下りれば下までつくところですが、途中で骨折か捻挫し、それですぐ携帯電話で救助要請です。男性も大勢いるのに、何でも救助要請。まるで、タクシーみたいに使うのです。昨日、警察の遭難事務担当者会議が開かれたのですが、そこでもやはり安易な救助要請が問題になっていました。今携帯電話が爆発的に普及し、すぐ救助要請をし

ます。今、東京都山岳連盟では、セルフレスキューを盛んに進めているのです。自分たちのことは自分たちでやるようにしようということなのですが、今はそういうプライドも何もないですから、すぐ携帯電話で救助要請し、バスケット担架をすつと持って行くと、パツとバスケット担架にさつと乗って、もう動こうとしない。テコでも動かないというような感じなのです。それもまた肥えていて。もしプライドがあり、「私ちょっと我慢して歩いてみます。」なんて言えば、「いや、我慢するな。乗れ乗れ」って乗せるのですが、最初からテコでも動かない。私はあまり怒らない人間ですが、そういう態度を取られても、でもやっぱり担いで、搬送しなければならない。よしちょっと休憩だって、ドンと下ろそうかなんて考えたりもしますが、でもそうはいかない。プライドの欠如っていうのは、急に山を始めた方です。やっぱり山を学習していないというか、それから来ているのじゃないかと思うのです。

毎年、年間100日間も山に入っているなんていう高齢者のベテランが死んでいます。こういうベテラン登山者が何で死ぬのかなと考えてみると、ベテランや昔から山をやっている人は、ある程度経験と技術でカバーできるのです。昔から山登りなんかやっている人は、たとえば一ノ倉の南稜を登ったり、穂高の北尾根を登ったり、その程度はできます。あれは技術と経験、昔取った杵柄ですから、それは大丈夫なのです。私もこの年になって、岩登りもまだやっています。それは技術と経験からそうやってできるのです。

しかし、山はそうじゃないのです。ああいうベテランが落ちて死ぬということは、その経験と技術の及ばない領域があるということです。そこには何の目印もないから、思わずそこに踏み込んでしまう。だから、経験と技術じゃ太刀打ちできない領域があります。それはやはり体力ということです。そういうことでどんどん死んでいるのです。ですからこれは私も皆さんもそうでしょうが、肝に銘じなければならない志向です。私もいつも普通の人よりは体力が落ちていないと思うのですが、そうじゃないのです。やっぱり体力は年々落ちているのです。それを技術と経験でカバーしているだけなのです。それを及ばない領域があるということを、よく考えて行動しなければならないと最近はずっと思っています。

それと、最近の登山者の志向として、5万分の1の登山地図に実線の赤線の登山道の入っていないところに非常に多くの登山者が入っているのです。自分の登ったところに赤線を引いて、登山地図を真っ赤にしたいという、そういうこともあるでしょう。ですから、そういう実線のない尾根筋、沢筋にどんどん入っています。そういう本も出ているし、そういうクラブもあります。それがパーティーで行くのなら問題はないと思うのですが、単独で行くと、これは危ないなといつも思っているわけです。

もう一つ気になるのは、インターネットが今爆発的に普及しています。今の中高年は、皆インターネットで引き出して、参考にして山に来ているのです。インターネットでは、ホームページを持っている人は書き込みが自由です。どこへ登った、あそこに登ったという自慢話も書き込めるわけです。道のないこんなところを登ったとか、たいしたことはな

かったなど、そういう自慢や誇張、ホームページでは公序良俗を犯さない限り書けると思うのです。それを活用する側には、それなりの目がなければだめだと思うのです。

奥多摩では3月までは雪が降ります。今年の3月、奥多摩のある尾根を登った日陰名栗峰という1700メートルの山ですが、そこに登った人が帰ってこないという要請があり捜索をしました。登山道のない尾根を登って山頂に立って、登山道のない尾根を下りるといふ計画でした。ちょうど雪も降り、そこを登ったり下りたり、もう約6日間捜索しましたが、とうとう見つかりませんでした。日原川っていう川があり、そっちに落ちたらもう流されているかもわからないということで、6日間捜索しましたが、もうお手上げでした。その3日後に、日原川のヤマメ解禁があるので、流されたのならヤマメ解禁で見つかるだろうという話で、とりあえず大掛かりな捜索は打ち切ったのです。警察は他の仕事もあるわけですから、ずっと見つかるまで探すということは出来ないわけです。その時は、もう東京都山岳連盟あたりに探してもらおうのです。

そしてその3日後、ヤマメ解禁の日、釣り人により発見されました。もちろん死んでいました。それがやはり道のない尾根をインターネットで引き出して、その資料だけ持って行っているのです。入り口を間違え、ずっと上流の方から登って行こうとして8メートルほど滑落していました。河原に仰向けで亡くなっていましたが、落ちた時にはまだ息があったようです。腕をケガしてぐるぐるタオルで巻いていました。足もボッキリ折れていました。そんな遠い場所ではないので、もう少し知恵があれば、暖を取ったりはできたのでしょうが、そういう焚き火も出来ない。もう少し気力があれば這って行けたのでしょうか。そうすれば、薪や何かあって、焚き火もできたでしょうに。その次の日にまた雪が降って、そこに行ってみるともう固まって凍っていました。非常に残念でした。もう少し何とかできなかつたのかなと思いました。ヘリも飛んでいたのもう少し派手な黄色いヤッケだとか着ていれば、すぐヘリでも発見できるような場所だったのです。それが地味な灰色の上着と暗いザック、やはりそういうことも必要だと思うのです。年寄りになったらもっと派手に、そうすれば、上空からでも発見できたような気がします。それと笛を持っていてビービー吹けば、上を林道が通っていたので、そういう残念な遭難が起きています。

ですから、私が最近気になる志向というのは、そのインターネット情報、それと登山道のない尾根を登る。これが複数で登ったのなら絶対防げた事故です。何かちょっとおかしいじゃないって一人が言えば、あそこへ入っていかなかったでしょうし、一人が落ちても、まだ生きているのだから、救助要請はできる。これが悲しいかな単独で入っていったところ、死んでしまった原因があるのではないかということです。ですから、そういう尾根を登る際は、複数で登りたいものです。バリエーションルートとして、複数で登れば大丈夫ですが、悲しいかな今単独で登る人が非常に多く、いくつになったら山を辞めろなんていうことはないのですが、平均的日本人なら70歳くらいになったら単独登山は、自粛したらいいかなという感じはしています。

今、非常にそういうことが気になっています。遅く始めたので、いくつまで登れるかっ

て、そうみんな考えています。山ってというのがこんなにいいものだったら、なんでもっと早く始めなかったのかとみんな思っています。確かにそれだけの魅力があるから、私なんかも40何年もへばりついて、魅力を楽しんでいるのです。それで、また仕事まで山にいつてやっている。仕事で山をやっていると、プライベートではなかなか行かなくなる。まあ登山のクラブをやっていますから一緒に仲間では行きますが、歳を取ってきたせいかもしれないませんが、以前よりはプライベートで行かなくなりました。

それと、去年の11月だったですか、最近話題になっています南房総で30人の道迷い、あのニュースを聞き、とにかく道は何本もあるわけですから、ああいうところは非常に難しいと思います。家であのテレビニュースを見ました。それがNHKニュースのトップで報道しているのです。ああ、これは、この人たちはかわいそうだなと。当然、その辺でケガしているとか、死んでいるとは思いませんから、その辺で暗くなってビバークして、それで携帯電話が通じない。それだけのことで、NHKがトップで報道すれば、警察の救助隊も、消防だってみんな動かなければならない。朝になって出てくるとき気の毒だなと、山屋としてそう感じたわけです。次の朝出てきました。あれはかわいそうですよ。彼らも当然、ミスはあったわけです。前に下見ももちろん行ってないだろうし、読図上のミスもあったようです。30人いっぺんにいなくなるというのは、その辺の長いつり橋を30人で渡ってつり橋切れてどさっとみんな落ち、みんな死んでしまったなんていうのは、あの辺ではそういうことはあまり考えられないです。奥多摩の場合は、一人や二人ならもう少し待って、上でビバークして明日の朝降りてくることが多いから、朝降りてこられるような時間帯まで少し待って、それから行動を起こします。それでも帰ってこないようになったら、みんなで探します。彼らのミスは当然あったと思うのですが、少しかわいそうなような気がしました。私は、報道を非難しているわけではないですが、少し彼らのことを考えたら、そんな気がしました。

それともう一つ、石川県と福井県の境で14人ですか、大長山というところで冬山遭難、関西学院大学のワングル部が登って帰ってこなかったという事故がありました。私もその大長山にも登ったことがないし、その辺の雪の状況はニュースで見る限りでしか知りませんが、あれも非常に非難されました。山は、自らの責任で行動して、自らの安全に責任を持つ、そういうまさにこの前イラクの人質で、非常に自己責任が叫ばれましたが、山ほどこの自己責任という世界はないのです。山は自己責任です。ですから、遭難して救助隊やその他民間の山岳救助隊が出て、救助にあたれば税金を使うわけですし、山で遭難すれば、なんか原因があったわけですから、当然非難されます。あえて、それを黙ってがんばって耐えるしかないのです。

当然、大長山の場合も報道されて救助要請があり、何とか14人が救助されました。私も新聞報道で読むことしか分らないのですが、その状況は読む限りにおいては、食料、装備なんかまあまあいいのじゃないかと思いました。これじゃだめだと言う人も大勢いると思います。判断です。ちょっとその判断が甘いところがあったのでしょうか。それと、山と

いうものに対しての知識、これもちょっとあまいところがあったのでしょうか。日本海側の雪は湿気があって非常に重い。それにドカ雪が降る。

彼らは、リーダーが3年生です。大学3年生は、冬山を1年から始めたとしても2シーズンしかやっていません。高校から始めれば、もっとやっているかも分りませんが。大学生はそういう経験がまだほんとうに浅いわけですから、この判断というのは非常に難しいと思うのです。それで、何とか救助要請をし、救助されました。あそこで救助要請するには、リーダーは非常な勇気、苦渋の判断で救助要請をしたと思うのです。彼らも山屋としてのプライドを持っているでしょうから、あの場で救助要請をして、全員がケガもなく助かったというのは、私はあれでよかったのじゃないかと思います。あれで犠牲者が一人出たとなれば、これは大変です。ですから、非常に苦渋の判断であったとは思いますが、あそこで救助要請して全員が下山できたということは、非常によかったと思っています。税金をいくら使ったというようなことは、自分の判断ミスですから、それはじっと我慢するしかないのです。あの事件、事故を、世間はどのような風に見ているかということここに、ある新聞のコラムを持ってきましたので、ちょっとそれを読ませてもらいたいと思います。大長山での遭難事故のことを扱って書いているコラムです。「しかし、若者たちが冒険や探検といったチャレンジ精神を避けるようになったら、国の将来はどうなるだろう。今どこの大学の山岳部やワンゲル部でも、入部者が激減している。重い荷を担いで、山に登り、つらい、きつい、くさいという訓練から逃げていく。楽しんで女の子と遊べるクラブに入るそうだ。関学のサブリーダーは、『また山に登りたいと思うか?』という記者の問いに、『登りたい』と答えていた。彼らは苦い体験の反省から、たくさんの尊い教訓を学んだはずである。日本の明日は、むしろそういう若者の手にゆだねたい。」こういうコラムがあったのです。この新聞の社説も、おおむね同じようなことを書いていました。ですから、新聞記者が書いてくれたということは、非常に山屋としてはありがたいと思っています。

メールのやり取りに非常に喜びを感じてやっている若者もいる。けれど、こういうチャレンジ精神の若者がいなくなったら、国の将来、未来は暗いというようなことを、この新聞のコラム記者は書いていました。

これから2人ほど山の知り合いのことを話して終わりたいと思います。谷川岳の山岳警備隊で馬場保男という方が隊長をしていました。彼は、去年3月に、55歳で救助隊長を辞めて、現在は谷川岳の「肩の小屋」で管理人として頑張っています。彼が辞めた去年、日山協と都岳連、勤労者山岳連盟と3者で「馬場保男君を励ます会」を行って、出席してきました。私も警察官で同業ですから、何かちょっと話してくれということで、馬場さんに「これは30数年前の話だからもう時効だろう、話していいかな?」と言ったら、「うん話していいよ、話したらいいじゃない」ということで、馬場さんの友人としてお話ししたわけです。私はプライドなんて大きなこと言っていますが、馬場さんに背負われたことがあるのです。谷川岳で遭難して、20代前半の若いバリバリの頃でしたから、谷川岳

の一ノ倉の烏帽子北壁、衝立岩の裏側にある壁ですが、その変形チムニーというルートを登っていたわけです。300メートルくらいの岩壁ですが、ちょうど100メートルくらい登ったときに、落石があったのです。恐ろしいですね。あの落石というのは、ブーンと飛んできますから。上を見たらものすごい数の石が、ガンガン落ちてくるのです。もうこれはだめだと思いました。ヘルメットにガツガツ当たるし、手も足もみんな当たっている。もうだめだと思ったのですが、私はトップで登っているものですから、他の連中は、ちょっとかぶっていて、下の方にいたから助かったのです。私が移動しようとしたら、もう手がブランと下がって、腕がギンギン動くのです。これはだめだ、「おーい、手折れちゃったよ」なんて、もう興奮しているから痛みなど感じないのです。

それで、何とか下まで仲間にも下ろしてもらって、それから、救助隊を呼んだのです。そうしたら、宇部さんに背負われてずっとあの衝立スラブを下りて、それでヒヨングリの滝の下から新隊員の馬場さんが背負って、出会いまで行きました。出会いには、人がいっぱいいるのです。「ちょっと、馬場さん下ろしてくれ」ということで、もう足を引きずりながら、何とか歩かせてくれっていうことで、歩いて車に乗りました。

そんなことで、私もそういう経験をしているのです。手を折った、足を折ったくらいでは、普通は新聞に出ないのですが、次の日の新聞には出ました。警察官が遭難するなんていうことは珍しいことですから、新聞は書き立てました。そんな30数年前の話ですが、馬場さんのはなむけにしたのですが、馬場さんはいつも「金さん、人背負えなくなったら救助隊を辞めようよ」なんて言っていたのです。でも、馬場さんはまだ背負えますよ、私でもまだ背負えますから。でも、彼は55歳になったら辞めようと思っていたらしいのです。今「肩の小屋」で管理人をやっています。去年、私も激励に行きまして、たらふく酒を飲んで下りてきました。そのうち、上毛新聞という群馬の新聞が、ちょっと谷川岳の特集をやっているから取材をさせてくれないかということで、背負われたあのことは言うまいと思っていたのです。記者が来て、やっぱり知っているのです。「金さん、馬場さんに背負われたことがあるそうですね」なんて、まあ事実ですから、そのとおり言いました。そうしたら、次の日の新聞にデカデカと載っていました。「遭難者の痛みを分る救助隊員が誕生した」とか、そんなことで私は救助隊をやっているわけではないのですが、単純に山が好きでやっているということなのです。私の友人の一人、馬場さんのことをちょっとお話ししました。

もう一人、皆さんはよくご存知だと思うのですが、山野井泰史という男がいます。世界でもトップクラスのクライマーでしょう。彼は、奥多摩の「むかしみち」なんていう国道から離れたハイキング道、そこに農家を借りて奥さんの妙子さんと住んでいます。彼の記録っているのはすごい。バフィン島のトール西壁単独初登から始まって、チョ・オユー南西壁だとか、レディースフィンガーとか、もう単独の記録はすごいです。感心するほどです。何回も死に目に会っています。2000年にK2の南南東リブを単独無酸素で登って、あの年の日本スポーツ賞の山岳部門で受賞しました。当然、文部科学大臣賞なんかの顕彰

も受けています。

妙子さんは、長尾妙子と昔は言っていましたが、その頃から彼女もすごかった。マカルー、8200メートルで、男性隊員をかばいながら2ビバークし、それで生還しました。男性隊員は亡くなりました。彼女は、第2関節の上から10本指全部を落としました。それでもまだ頑張っています。この2人っていうのは相当なものだと思っていたのです。そしたら2002年山野井と妙子さんは、ギャチュン・カンの北壁に登ってもものすごい死闘を繰り広げたのです。彼一人は登頂したのですが、妙子さんは途中7500メートルくらいでビバークして、帰りに悪天候に捕まったのです。この雪崩に飛ばされる、視力障害、すごい死闘を繰り広げて、それで下へ着いても誰もいない。悪天候に捕まって6日間、飲まず食わず、着の身着のままひざを抱いてのビバークでした。何とかベースキャンプまで歩ききりました。彼らでなければああいう生還というのは難しかったのではないかと思います。彼らのこの登攀は、第七回「植村直己冒険賞」に輝きました。

ですから、遭難には、質の高い遭難とか質の低い遭難なんていうものはあるわけないのですが、彼等の頑張りというのはものすごいと思うのです。背負われて下へ降り、山野井が遭難して帰ってきたぞということで、私は病院へ駆けつけたわけですが、もう手の指が5本、右足なんかも真っ黒です。妙子さんももともと指がないのですが、また真っ黒なのです。手術をして、妙子さんはかろうじてこの指の又が残ったというのです。親指ももちろんないです。それが、今年の春、またトレーニングを再開したのです。もう手も足も指がない。彼らはやっぱり山がなければ生きていけないのですね。

彼が書いた記録が「垂直の記憶」という本になって、岩と雪の7章という本が山と溪谷社から出ました。あれを読むとすさまじい山登りをやっています。天国に一番近い男、なんて言われていましたから。それでも彼らの生きることへの執着心というのはすごいです。それでとうとう歩ききって生還したのです。そして、また鍛えてやろうとしているのです。この前、顔を出したら、彼らはこの8月から、中国に5000メートル級の山があるのですが、1000メートルくらいある岩場をまた登りに行くのです。妙子さんは一生懸命いろいろクライミングギアをやっていました。キャメロットをやるわけですが、彼女は指がないのでこれができない。それで彼女は考えたのです。100円ショップからプラスチックの輪っかを買って来て、それをキャメロットの心棒に取り付け、そこに指のない手を突っ込んでやろうというのです。それほどのことをしてまで登るのです。えらいものだと思います。

今は、最高齢の登山者がエベレストに登った、最年少の登山者が五大大陸、最高峰に登ったなどそういうふうなものにマスコミが非常に飛びつくんですけど、彼らとは全然もう次元が違う話ですから。エベレストにいくら最高齢が登って、いくら最年少が登ってもヒラリーの価値って言うのは全然動かないわけです。これから最高齢、最年少なんていうのは、どんどん更新されると思うのです。でも、ヒラリーの初登攀、初登頂という価値は普遍です。

ですから、そういう山野井みたいな人もいるし、いろんな人がいる。もっともっと若者が、上を目指してほしいのです。さっきの新聞ではないですが、そういうチャレンジ精神とか挑戦、そういうものが若者になかったら、国の将来はほんとに心配です。

今日ここに集まっている皆様は、そういう登山の指導的立場にある人たちでしょうし、遭難救助にご尽力いただいている人がほとんどだと思うのです。ですから、今の若者が、そういうチャレンジ精神、挑戦、冒険、探検、そういうものにも目を向けるように努力してもらって、若者がまた山へどっと帰ってくるように、ご尽力をぜひお願いしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。